仇兆鰲『杜詩詳註』の音注について

――一萬を超す音注が意味するもの――

佐藤浩一

1　問題の所在――はじめに

杜甫の注釋書は數多い。『九家注』、『二十家注』、『六十家注』、『百家注』と增え續け、ついに『千家注』が現れるまでに至った。こうした千家もの注釋者たちの成果を取り入れて、康熙年間に現れたのが仇兆鰲『杜詩詳註』である。杜甫テキストの集大成的な存在として、『杜詩詳註』は、今日なお多くの人々にとって依據すべき杜甫テキストとなっている。たとえば中華書局の排印本は、二〇〇四年の時點で第六次印刷を數え、五四〇〇〇冊も刷られている。

これほどの通行性と重要性とに比して、『杜詩詳註』そのものに關する論考は、從來必ずしも充分とは言えぬ情況にあったのだが、近年になって、俄かに專門の論考が現れ始めた。[2] 稿者も『杜詩詳註』に關しては、①言語論、②傳本論、③文藝論という三つの側面から總合的研究を進めており、すでに②傳本論と③文藝論に卽して、幾つかの論考を公にしてきた。[3] そこで本稿では、①言語論という側面から、『杜詩詳註』內に見える「音注」について卑見を述べ、批正を仰ぎたい。

とりわけ本稿においては、音韻論的な觀點ではなく、これまで見過ごされてきた次の觀點に卽して、以下に考察を進めてゆく。

第一に、『杜詩詳註』には夥しい規模の音注が內在している、という點。從來の杜甫テキストの音注數と比べても桁違いに多く、まさにこの意味において音注は、『杜詩詳註』の大きな特徵として見過ごしがたい問題性を帶びている。

第二に、その音注を記した者が、はたして仇兆鰲本人であるか否か、という點。仇兆鰲は『杜詩詳註』の完成に際し、音注の校訂を友人に依賴していた。ゆえに大量の音注は、その友人によって書かれた可能性を含むことになる。もしも相當な部分を友人が擔當していたとすれば、その友人の經歷に卽して、『杜詩詳註』の音注を檢討する必要が生じよう。

第三に、何故それほど多くの音注が附されたのか、という點。この大量の音注が、いったい何を意味するのか、想定しうる諸要素に卽して、音注執筆者の意圖を明らかにしてゆきたい。

2　特色としての一一〇三五箇所の音注

(1) 四三六〇箇所の音注——文字媒體

『杜詩詳註』の音注に關しては、從來全く指摘されてこなかったわけでもない。たとえば陳若愚「仇兆鰲《杜詩詳註》音釋評議」[4]は、その發言例の一つである。とりわけ陳若愚論文では具體的な音注數にまで踏みこんで指摘がなされており、『杜詩詳註』の音注數を約六〇〇〇餘箇所と認定する。ただし、稿者も『杜詩詳註』に記述された音注を數えてみたところ、合計は四三六〇箇所であった（その內譯は、詩四〇七四箇所、賦二二九箇所、文五七箇所）。この點、陳若愚氏が認定する六〇〇〇餘箇所とは隔たりが有るのだが[5]、いずれにせよ少なくとも四三六〇箇所を下回ることはなく、既にこの音注數だけでも、未曾有の數字であることが了解される。從前の杜甫注釋書にあっても音注を含むものは數多いのだが、これほどの規模で音注を內在する注釋書は無い[6]。たとえば仇兆鰲が頻繁に引用する王嗣奭『杜臆』には僅か二二箇所、錢謙益『錢注杜詩』にも八三箇所の音注しかない。音注の多さが印象的な王琦『李太白文集』を以てさえしても、數量は九〇六箇所を數えるにとどまる。いかに『杜詩詳註』の音注が、他の別集と比べても桁違いの多さであり、かつ特殊なものであるかを窺い知れよう。

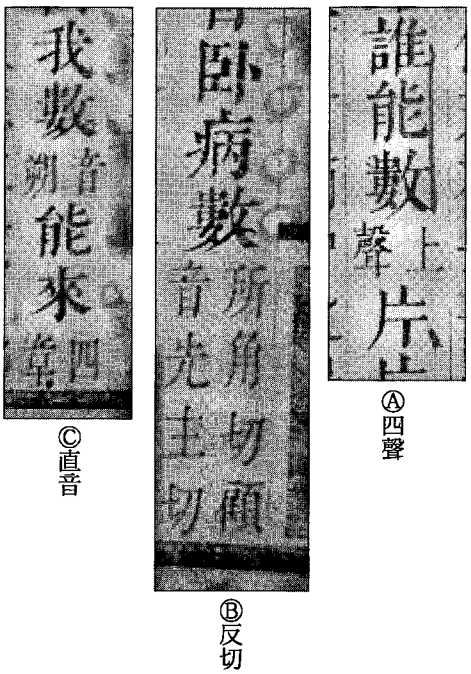
『杜詩詳註』に記された音注には、おおむね次の三點が傾向として認められる。

《1》破音の注。すなわち、一つの字に二つ以上の發音が有るとき、その字をいかに讀み分けるかという音注。これが全體の大多數を占めている。

《2》讀みにくい難字に關する音注。

《3》四弊八病說や叶韻說などに關する、韻律論的な音注。

——大別すると、以上の傾向が擧げられる。そしてこれら音注は、Ⓐ四聲（53%）・Ⓑ反切（23%）・Ⓒ直音（21%）を中心に表記されており、たとえば「數」字を例に擧げると、次の如く記されている。



Ⓐ四聲　Ⓑ反切　Ⓒ直音

寫眞1　康熙42年初刻本に見える音注。丁福保舊蔵本（復旦大學圖書館蔵）。

右のように、同一文字に複數種類の表記によって音注が附されているのは、まずは破音であることを示す點に注釋上の比重が多く置かれていたため——と推測されよう。

そしてこのような音注が、『杜詩詳註』には四三六〇箇所という夥しい規模で存在していたのである。この音注の存在は、從來必ずしも充分に注目されてこなかったのだが、今後はまずは語るべき該書の特色として、注意が喚起されてよいであろう。

(2) 六六七五箇所の圈發——記號媒體

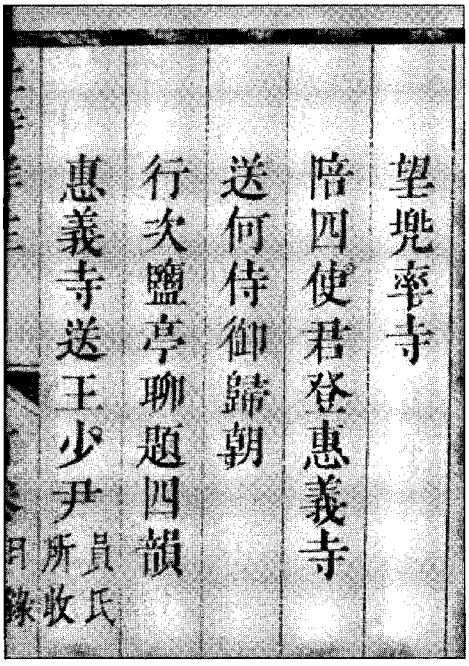
右までに、四三六〇箇所という音注の內譯を確認した。この數だけでも膨大と言えるのだが、仔細に觀てゆくと、更にそれを上回る規模の音注が、ほとんど氣付かれぬままの狀態で、『杜詩詳註』に內在していたことが判った。

その音注とは、圈發と呼ばれる記號である。すなわち、圈點の位置によって聲調を示す音注（左下＝平聲、左上＝上聲、右上＝去聲、右下＝入聲）[7]のことである。あらためて前掲の寫眞1ⒶⒷⒸを觀てみると、「數」字の隅に、圈點が施されており、上聲で發音するⒶは左上に、入聲で發音するⒷⒸは右下に、それぞれ圈點を確認できる。このような圈發が『杜詩詳註』の中に、六六七五箇所も存在していた。その內譯をまとめると、次の表の通りである。

	本文	注	合計
首卷	118 うち目次に80	37	155
1	74	162	236
2	58	142	200
3	71	162	233
4	67	49	116
5	102	233	335
6	114	251	365
7	59	149	208
8	78	140	218
9	97	151	248
10	113	154	267
11	83	184	267
12	74	120	194
13	91	132	223
14	110	165	275
15	119	154	273
16	98	314	412
17	74	192	266
18	91	142	233
19	69	100	169
20	106	150	256
21	102	133	235
22	79	94	173
23	67	96	163
24	94	187	281
25	226	72	298
附上	234	44	278
附下	75	23	98
合計	**2743**	**3932**	**6675**

【表】刻本內に見える圈發の數

右表から解るとおり、圈發は、本文のみならず、注にまで三九三二箇所も附いていた。さらには、首卷の詩題目次にさえも、八〇箇所の圈發が施されており（寫眞2）、その徹底した注釋態度が窺える。



寫眞2　目次（丁福保舊蔵初刻本）。「率・使・朝・少」に圈發が見える。

これら總計六六七五箇所の圈發は、破音（派生音）を示す場合に附けられており、初音（基本音）には無い。つまり、圈發の有無によって、發音と意味の兩方の辨別を可能にしている。寫眞2を例に擧げて言うならば、「使者（名詞＝去聲）」の意で用いられた「使」には圈發が附いている一方で、基本義で用いられた「行」と「王」には圈發が無いことが確認できる（破音は「行い（名詞＝去聲）」、「王とす（動詞＝去聲）」）。とりわけ「朝」は、初音も破音も同じ平聲であるわけだが、『杜詩詳註』內では、「早朝（濁聲母）」という意の場合は圈發が無く、「朝廷（清聲母）」という意の場合にのみ圈發が附けられている。圈發の有無によって、やはり發音と意味の辨別が示されていることが了解できよう。

（3）他テキストにおける圈發

さて、このような圈發は、他の杜甫テキストではどうなっているだろうか。主要な杜甫テキストを網羅する『杜詩叢刊』（三五種、黃永武編、臺北大通書局、一九七四年）を調べたところ、『杜詩詳註』より以前の杜甫テキストの内、圈發を含むものは、次の一種にのみ確認し得た。

①范梈批點、鄭鼐編『杜工部詩范德機批選』元刻本（圈發三三九箇所）

※『杜詩叢刊』所收の、元・趙昉『杜律趙注』[8]（明萬曆一六年新安吳氏七松居藏本）にも僅かに圈發が見えるのだが、これは趙昉の手による圈發ではなく、後人による書き込み。

つまり、仇兆鰲も參看していた劉辰翁・黃鶴・單復・朱鶴齡・錢謙益といった杜甫注釋者たちのテキスト内には、圈發が無かったのである。この『杜詩叢刊』には、『杜詩詳註』より以前の注釋書が二九種收錄されており、その内で僅か一種という事實は意外な程の寡なさではあるのだが、見方を變えれば、もとより杜甫の詩集における圈發とは、それだけ稀な存在たることが窺えてこよう。また、『杜詩詳註』より後に書かれた主要な杜甫テキストとしては、次のものに圈發が含まれていた。

②浦起龍『讀杜心解』雍正二年序靜寄東軒刊本（一八三箇所）

③沈德潛『杜詩偶評』乾隆一二年序享和三年東都書林刊本（六二四箇所）

④沈德潛『杜詩評鈔』明治三〇年田中文求堂刊本（七一〇箇所）

⑤楊倫『杜詩鏡詮』乾隆五六年刻同治一一年重校刊本（二六七箇所）

⑥許寶善『杜詩注釋』光緒三年吳縣朱氏補刻本（八八六箇所）

②『讀杜心解』と⑤『杜詩鏡詮』にも『杜詩詳註』ほどの數量は無く、まして注や目次にまで圈發は附いていなかった。この意味においても、六六七五箇所という圈發が、いかに多いものであるかを改めて實感できる。例外的に③④沈德潛と⑥許寶善はやや多いものの、それでも圈發の數は三桁を超えぬ規模にとどまる。[9]

この他、主要な詩文の注釋書を觀たところ、『李太白文集』（康熙五六年吳門繆日芑雙泉草堂影宋刻本）・『白香山詩集』（康熙四二年古歙汪氏一隅草堂刻本）・『李義山詩集』（康熙四七年徐氏花谿草堂刻本）・『施注蘇詩』（康熙三八年緯蕭草堂刻本）等といった、多くの名高い諸テキストにおいても、やはり音注としての圈發は含まれていなかった。[10]

こうした趨勢から觀てみると、『杜詩詳註』以外の主要な杜甫テキスト――より廣範に言えば「詩集」全般――に圈發が含まれぬことは、それほど珍しくはなく、むしろ含んでいる『杜詩詳註』こそ珍しい部類に入ることが、客觀的に窺えてこよう。

むろん圈發という注釋それ自體は、決して新奇なものではなく、讀書人社會において舊くから傳わる注記方法である。[11]經書や史書に多くは見え、唐の[12]張守節『史記正義』はその名高い一例であるし、宋代でも朱熹の門下が、『經典釋文』『群經音辨』等に依り圈發を施していたという具體的な記錄が傳わる。[13]また金文京氏によると、明代の內府本には、ほぼ例外なく圈發が含まれており、その一つが『永樂大典』[14]であったという。[15]

實際、この『杜詩詳註』においても、康熙三二年に皇帝へ進呈された抄本『杜詩詳註』には、さながら内府本『永樂大典』を彷彿させるような、朱色鈐印による圈發が確認できる。[16] また、康熙四二年に杭州の行在所で進呈された刻本『杜詩詳註』においても、圈發が確認できるのである。ところが、そのような抄本と刻本には存在していた圈發は、排印本『杜詩詳註』に編集された時點で削除されてしまい、このため、もともと詩集には稀な圈發は、いっそう今日の讀書人には氣付かれ難い音注となってしまった。先行研究においても圈發への言及例は全く無く、前掲の陳若愚論文にしても、同氏が認定する音注數六〇〇〇餘箇所とは、排印本にのみ依據して調べた數字であって、本來『杜詩詳註』が含んでいた大量の圈發までは檢討していない。

從來の標點研究では、文意の强調や句讀としての標點に卽した研究が多く行われていた。しかしながら圈發も標點の一種であることを見落としてはなるまい。この圈發という、記號媒體としての六六七五箇所の音注と、先に明らかにした文字媒體としての四三六〇箇所の音注とを併せると、その總數は、實に一一〇三五箇所にまで達する。むろん一萬箇所を超える音注を含む杜甫のテキストなど、他には存在しない。この未曾有の音注數を『杜詩詳註』は含んでいるという事實を、本稿では指摘しておく。

3　音注執筆者の特定
——仇兆鰲か、友人の金埴か

(1)　金埴による音注の校訂

さて右までに、『杜詩詳註』には一一〇三五箇所の音注が內在していることを指摘した。ところが、ほとんど言及されていないことなのだが、これら音注は、他者によって書かれた可能性を含んでいるのである。[17] 果たして音注は、仇兆鰲その人の手に據るものか否か——この疑問を次に明らかにしておきたい。

仇兆鰲は康熙三二年に『杜詩詳註』抄本を最初に書き上げ、その後も幾度となく改訂を重ね、亡くなる四年前の康熙五二年に、今日傳わる最終的な體裁に仕上げた。その仕上げ段階、すなわち康熙五〇年において、仇兆鰲は退休して故鄉の鄞縣（寧波）へ歸った。その途中、友人・金埴のもとに立ち寄り、『杜詩詳註』音注の不備を補訂してほしい、と依頼していた。このことは、金埴自身が明らかにしている。

仇公兆鰲以少宰致政歸、過埴杭邸曰、聞子精說文之學、極辨四聲。……因訊以杜句「池魚涸其泥」用在十灰韻中。埴應聲曰、此見（※音注：見、現）于張孟陽詩。少宰大慰、卽出（※音注：出、昌瑞切）其所撰杜集詳註二十八卷、命埴補注其四聲未備者。凡載餘卒業、續授棗離。夫字義、大矣。四聲之學、深矣。

（仇公兆鰲は少宰を以て致政して歸り、埴の杭（州）の邸を過ぎりて曰く、「聞く、子は『說文』の學に精しく、極めて四聲を辨ず」と。……因りて訊ぬるに杜句「池魚、其の泥に涸る」の用ふるに十灰韻中に在ることを以てす。埴、聲に應じて曰く「此れ張孟陽（張載）の詩に見る」と。少宰大いに慰んじ、卽はち其の撰する所の『杜集詳註』二十八卷を出し、埴に命じて其の四聲の未だ備わらざる者を補注せしむ。凡そ載餘にして業を卒へ、續けて棗離（雕刻印刷）を授く。夫れ字義は、大なるかな。四聲の學は、深なるかな。）　（金埴『不下帶編』卷二）

金埴[18]は浙江山陰（紹興）の人。康熙二一（一六六二）年の生まれゆえ、仇兆鰲とは二六歳の年齢差がある。乾隆五（一七四〇）年に七八歳で卒した。『說文解字』に詳しいことで知られ、その評判は仇兆鰲が音注のチェックを依頼するほどであった。かくして金埴は『杜詩詳註』音注を補訂したのだが、しかし三〇〇年以上が經った今日、次の問題點が生じた。もし殆どの音注を金埴が注記していたとすれば、かれ金埴の經歷と方音に卽して研究する必要が生じてくる點。また今日、排印本で確認しうる音注とは、實は仇兆鰲オリジナルではなく、金埴の手に據るものであった可能性が生じてもくる點。つまり日頃「仇兆鰲は……と音注を附している」と語る表現にしても、實は「金埴は……と音注を附している」と語るべきかもしれぬわけである。

（2）四三六〇箇所の音注——文字媒體

まずは、四三六〇箇所からなる文字媒體としての音注に卽して、執筆者を明らかにしておく。金埴の著書を觀てみると、夥しい量の音注が記されており、たとえば右の引用文だけを觀ても、わずか數行の內、すでに二箇所の音注（「見、現」「出、昌瑞切」）が確認できる。その表記は、『杜詩詳註』內に見える四三六〇箇所の音注を彷彿させる程に近似しており、いっそう金埴によって『杜詩詳註』音注も手掛けられた可能性を思わせる。果たして四三六〇もの音注が有る中で、どれが仇兆鰲、どれが金埴に據るものなのか。

この判別をすべく、抄本および初刻本を調査し、排印本と比較して校勘を行なった。[19]なぜなら抄本（康熙三二年）および初刻本（康熙四二年）は、仇兆鰲が金埴に補訂を依賴した時點（康熙五〇年）より以前の本であるため、金埴の手は全く加わっていない。從って、兩者を比較すれば、少なくともどれが仇兆鰲による音注かを判別することが出來るわけである。

比較調査の結果は、次の通り。『杜詩詳註』には、四三六〇箇所の音注が存在している。そのうち僅か二箇所にだけ大きな異同が有った。[20]つまり音注の大部分は、仇兆鰲その人が書いていた——と判斷できる。

（3）六六七五箇所の圈發——記號媒體

次いで六六七五箇所の圈發に卽し、撰者仇兆鰲の手に據るものか否かを明らかにしておく。

觀ると、四三六〇箇所の音注と六六七五箇所の圈發とでは、ほぼ同じ箇所に重複して記されている（寫眞1）。はたして重複して附ける必然があるのだろうか。またそれとは逆に、音注と圈發とでは、食い違う箇所が僅かながらも存在している。[21]はたして食い違うものだろうか。そう考えてみると、これは各々別人の作業であり、あるいは仇兆鰲が四三六〇箇所を書き、圈發は金埴が擔當した、とも推測される。

この疑問を明らかにすべく、やはり金埴の手が加わっていない、初刻本を改めて調査してみた。その結果、次の事實が判明した。

この夥しい圈發は、初刻本の時點ですでに存在しており、やはりこれも仇兆鰲に據って附された音注であった。音注と圈發とが食い違っていた箇所にしても然りであり、やはり初刻本でも同樣に食い違うままであった。つまりこれは、仇兆鰲か刻工のどちらかが誤って殘してしまった結果であり、恐らくは誤刻であった、と推測される。

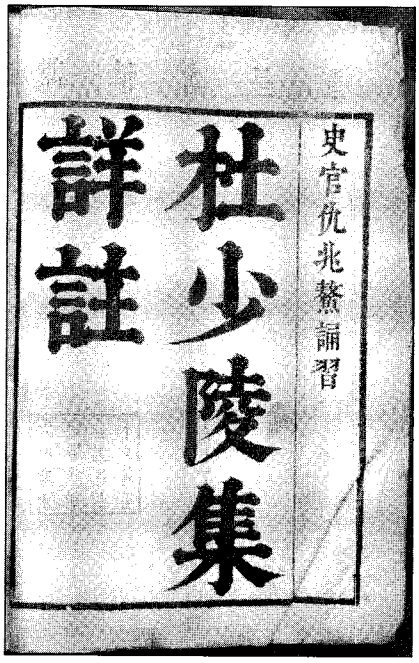
以上のとおり、『杜詩詳註』に含まれる一萬を超す音注は、仇兆鰲

その人の手から生み出されたものであり、そして先ずは仇兆鰲の經歷や思想に卽して考察すべき對象である、ということが結論できる。

それでは、いったい何故、仇兆鰲はこれほどまで夥しい音注を附けたのであろうか。この『杜詩詳註』を手に取る讀者とは、大別すれば①仇兆鰲、②一般讀者、③皇帝――以上の三者に絞り込め、それゆえ音注もこの三者以外を對象とはしていない。そこで以下に、この三者に卽して音注執筆の要因を考察してゆく。

4　仇兆鰲の學問――音注執筆の要因（一）

（1）誦習による執筆



寫眞3　中表紙（丁福保舊藏初刻本）

第一の要因は、仇兆鰲が「誦習」という行爲を通じて『杜詩詳註』の執筆を行っていた、という點に求めるべきであろう。初刻本の中表紙を觀ると（寫眞3）、「史官仇兆鰲誦習」と記されている。[22]「史官」とは、仇兆鰲が翰林院にて『資治通鑑朱子綱目』の校閲や『大淸一統志』『明史』の編纂等に携わっているゆえ[23]の自稱である。「誦習」とは、史官たる仇兆鰲が、杜甫の詩を繰り返し讀み親しんでいることを明言した表現である。仇兆鰲は「誦習」した發音を「誦習」したままに『杜詩詳註』へ書き附けてゆき、かくて大量の音注も生み出されていった――ということが先ずは理解できよう。

しかしながら單なる「誦習」だけであれば、それは讀書人としておよそ當然の嗜みと言える。仇兆鰲のばあい、それだけでなく、更に辿った文字の發音を、一萬箇所以上も記せるだけの音韻知識を持ち合わせてもいた。この點に着目し、さらに掘り下げて考える必要がある。これはいったい何故なのか。

あり得べき理由の中で、このことは何より、仇氏の家學に淵源していると見なすべきであろう。すなわち「音韻」こそは、仇家の家學であったのである。仇兆鰲は、正統な讀書人家庭[24]の教育を受けており、五歲の時點で、すでに反切を理解していた、と自ら語る。

> 自五歲讀書、能日誦五行、敎以字音反切、通數韻而各韻皆曉。（五歲より書を讀み、能く日び五行を誦し、敎わるに字音反切を以ってし、數韻に通じて各韻皆曉る。）
>
> （『尙友堂年譜』[25]）

また彼の次男・仇廷模（康熙五〇年擧人）にしても、『毛詩證韻』『集韻類紐序編』といった研究書を著わす[26]ほど、古音に關心を有する學者に育っていた。つまり仇兆鰲の音韻への關心とは、『杜詩詳註』執筆に及んで突如持ち出した關心ではなく、すでに幼少から培われ、

しかもそれを息子に傳えるほどの、脈々たる持續的關心であったわけである。仇家が、このような音韻への關心をそもそも有する家庭であったことを思い合わせれば、『杜詩詳註』にこれほどの音注を附せる音韻知識も、およそ無理なく納得することが出來よう。

（2）考證學としての古音研究

音注執筆のさらなる要因として、考證學との關連も擧げるべきであろう。當時、考證學の一環として古音研究の氣運がいっそう高まっていた。すなわち顧炎武が、古音の解明に依據した經書解釋を試みたことに始まり、小學（文字・訓詁・音韻）發展の土臺が築かれる。そして、唐宋古詩がいかなる音で詠まれていたかを考證する研究が、次第に活氣を帶び始めていった。[27] 王士禎・趙執信・毛奇齡・邵長蘅・李因篤・潘耒・毛先舒・張遠らは當時の代表的な關係者として擧げられよう。ほかならぬ仇兆鰲においても、こうした考證學の一環として、杜甫詩がいかなる發音で詠じられていたかを考究する側面が有った、と思われるのである。古音研究の氣運が高まる時代相の中で、音注執筆の意欲はいっそう深まりやすくなっていたのではないか。

もとより考證學に關しては、仇兆鰲も特に正統な薫陶を承けており、彼は同鄕同年の友人、萬斯同（一六三八～一七〇二）とともに、黃宗羲（一六一〇～一六九五）の講筵（證人書院）に列していた。[28] 爾來、仇兆鰲が師匠に寄せた敬意は三〇年近く經っても變わることなく、そのことは、『杜詩詳註』抄本を完成させた康熙三二年の時點でも、黃宗羲を「吾師梨洲先生」と呼び、自らを「受業仇兆鰲」と稱したことからも明らかである。[29]

黃宗羲といえば、考證學の基礎を築き、顧炎武、王夫之とともに清初三大思想家の一人として名高い。その考證學の薫陶を承けた仇兆鰲は、『杜詩詳註』編纂においても、より實證的な態度で臨み、實態を考證し、突き詰めようとしたのではなかろうか。そして、その實證的な態度を音韻レベルでも發揮し、杜甫が詠んだ音を杜甫が詠んだままに再現しよう、と希求していたように思われる。

この仇兆鰲の注釋態度を反映する發言として、『杜詩詳註』序文に見える次の發言に着目しておきたい。

註杜者必反覆沉潛、[30] 求其歸宿所在、又從而句櫛字比之。庶幾得作者苦心於千百年之上。恍然如身歷其世、面接其人。而慨乎有餘悲、悄乎有餘思也。（杜に註する者は必ず反覆して沉潛し、其の歸宿する所を求め、又た從りて、句もて櫛べ字もて之を比べん。庶幾はくは作者の苦心を千百年の上に得んと。恍然として身は其の世を歷り、面は其の人に接するが如し。而して慨乎として餘悲有り、悄乎として餘思有るなり。）

（中華書局排印本「原序」二頁）

この發言の趣旨は、杜甫が本來表現していた深みにまで掘り下げた注釋をすることによって、作者杜甫の心を今日に再生できる、という點にあろう。こうした態度が、音韻レベルにおいても發揮されて、音注という形となって現れたのではなかろうか。

（3）「知人論世」の一環として

右發言は、同じ『杜詩詳註』序文において、別表現によって言い換えられている。すなわち孟子の名高い詩論「知人論世」[31] である。ほぼ同趣旨の文脈で語られる「知人論世」は、仇兆鰲の主要な考えであり、

また主要であるがゆえに、右發言とともに相互補完的に同義反復されているのだろう。以下、このことを確認しておきたい。

蓋其爲詩也、有詩之實焉、有詩之本焉。孟子之論詩曰、頌其詩、讀其書、不知其人、可乎？　是以論其世也。……謂得其詩可以論世知人也。（蓋し其れ詩を爲るや、詩の實有り、詩の本有り。孟子の論詩に曰く「其の詩を頌し其の書を讀むも、其の人を知らずして可ならん？　是を以て其の世を論ずるなり」と。……謂ふに其の詩を得れば以て世を論じ人を知るべきなり。）（「原序」一頁）

「知人論世」とはつまり、「古えの人を友としてたっとび、その詩を讀もうとするとき、その人自身を理解せずして理解は深まらない。だからその人が生きていた時代を論ずる必要がある」という說理である。孟子はそれを「尙友（古えの人を尙び友とすること）」だと結論する。[32]

實はこの「尙友」こそは、仇兆鰲の自號に他ならない。たとえば仇兆鰲には自訂年譜が現存し、これを『尙友堂年譜』という。してみれば、「尙友」と直接の因果關係にある「知人論世」は、尙友を名乘る仇兆鰲の哲學と、直接に關連した詩論であることが判ろう。

それを踏まえた上で、再度『杜詩詳註』序文に「知人論世」の語が見える意味を考えると、次のことに氣付く。第一に、尙友こと仇兆鰲にとって、尙ぶべき友こそは、杜甫であるということ。第二に、それゆえ『杜詩詳註』においても、杜甫への理解を深めるため、杜甫が生きた時代を丹念に考證して論じる必要があったということ。第三に、まさにこの意味において、杜甫が生きた時代の杜甫の發音を論じようとした音注こそは、「知人論世」の一環として詳述されるべき注釋だった、ということ――以上のことが指摘可能となろう。

5　讀者への配慮――音注執筆の要因（二）

（1）重複ゆえの大量化

さて大量に附された『杜詩詳註』の音注は、文字媒體としての音注が四三六〇箇所、記號媒體としての圈發が六六七五箇所、總計一一〇三五箇所にも及んでいる。ただしこの一萬という數量は、一萬種類の漢字に注記されているわけではなく、重複を厭わず附された結果でもあることに留意しておきたい。

まず四三六〇箇所の音注を辿ってゆくと、同じ字に對して、ほぼ同じ內容の音注が繰り返されているケースが少なくないことに氣づく。[33]『杜詩詳註』內で反復される上位文字を幾つか擧げると次の通り。[34]

187復、扶又切／135朝、音潮／128使、去聲／122爲、去聲／122應、平聲／109看、平聲／108下、去聲／97興、去聲／92上、上聲／90重、平聲／81少、去聲／76曾、同層／69論、平聲／63將、去聲／61過、平聲／52道、去聲

（數字は出現回數）

まさしく、前掲『杜詩詳註』序文で述べられた「杜に註する者は必ず反覆して沉潛する」という發言が、音注レベルにおいて、その言葉通りに實踐された注釋態度だと肯けよう。これだけ重複すると、あるいはくどさを讀者に感じさせるかもしれない。しかしこれら音注を見渡してみると、一つの方針のもとに注記されていることに氣付く。す

なわちこれは、氣まぐれで附されているのではなく、ひとたび「復、扶又切」と注記したからには、以降去聲に讀むべき「復」が見えるそのたび毎に、重複を避けず注記されているのである。仇兆鰲のこうした態度からは、いわば原則優先の姿勢が垣間見られる。

このような煩を厭わず繰り返し注記するのは、「詩を正しく誦習したい」という仇兆鰲自身の熱意ゆえであると同時に、その一方で、「詩を正しく誦習してほしい」という讀者への配慮ゆえでもあったのだろう。すなわち、讀者が初音（基本音）と破音（派生音）とを正しく讀み分けられるようにするため、大量の音注を仇兆鰲は施す側面が有った、と考えられる。

そうした讀者への配慮は、とりわけ初學者への啓蒙的な態度において、より明確に讀み取れる。金埴によると、仇兆鰲が附けた音注には、「初學者への便宜ゆえに附けた音注」が有ったことが述べられている。

仇少宰滄柱撰杜詩詳註二十八卷、蓋殫一生之精力以成其書。御賜刊行已久。其中平仄發聲處、謬以埴佐其不逮、俾一一補注之。然杜詩亦閒（※音注：閒、去）有乖於平仄者、如平音而仄用、則標於傍曰、「義從平聲、讀從仄聲。」仄音而平用、則標於傍曰、「義從仄聲、讀從平聲。」公意以便初學也。然埴之絓漏者、尚多多矣。

（仇少宰滄柱は『杜詩詳註』二十八卷を撰す、蓋し一生の精力を殫くし以て其の書を成す。刊行を御賜せらるること已に久し。其の中の平仄發聲の處、（仇氏は）謬りて埴の其の逮ばざるを佐くるを以て、一一之に補注せしむ。然るに杜詩も亦た閒ま平仄に乖く者有り、如し平音にして仄用なれば、則ち傍らに標して曰く、「義は平聲に從ひ、讀は仄聲に從ふ」と。仄音にして平用なれば、則ち傍らに標して曰く、「義は仄聲に從ひ、讀は平聲に從ふ」と。公 以て初學に便せんと意ふなり。然るに埴の絓漏（遺漏）する者は、尚ほ多多なり。）

（『不下帶編』卷六、中華書局排印本一一二頁）

このような敎えて倦まざる啓蒙的な意圖ゆえに、かくも夥しき數の音注を、倦まず書き付ける側面が有った、と言えるであろう。もとより仇兆鰲は科擧に及第する前まで、私塾を開いて敎育に携わっており[38]、そうした經歷を持つだけに、啓蒙的な目配りもいっそう利きやすくなっていたのかもしれない。

（2）『杜詩詳註』特有の圈發

さて、右のような重複を避けぬ原則優先の姿勢は、六六三五箇所の圈發においても例外ではあるまい。破音を有する當該の文字に、ひとたび圈發を附けた以上は、その後も繰り返し附け、破音識別の目印に供している。

しかしながら、ここで注意すべきなのは、仇兆鰲は己れが執筆する全ての本に圈發を附けていたわけではない、という點である。たとえば注釋書『古本周易參同契集注』においては、文字媒體としての音注こそ附けるものの、記號媒體としての圈發を附けてはいない。『歷科大易文征』『挹奎樓選稿』という書においても、やはり圈發を附けていない。つまり圈發とは、『杜詩詳註』ならではの音注であることが了解できよう。このことは、先に第2節（2）で指摘したとおり、杜

甫の詩集――さらに言えば詩集一般――には圈發がおおむね無い、という點も思い合わせると、よりいっそう圈發を含む詩集『杜詩詳註』の特殊性が際だってくる。

ならば仇兆鰲は『杜詩詳註』の他に、いかなるところで、圈發と關わっていたか。それは、『御批通鑑綱目』『孝經衍義』といった、いわゆる御覽本においてであった。仇兆鰲は、康熙二五年に『御批通鑑綱目』、康熙二八年に『孝經衍義』の編輯にそれぞれ參加しており、これら御覽本には、いずれも圈發が施されている。仇兆鰲はまさに御覽本の編輯に參加したこの時期――すなわち康熙二八年――に、京師で翰林院庶常館庶吉士をつとめながら、『杜詩詳註』の執筆を開始していた。[37] この同時期の作業という點で、御覽本の圈發と『杜詩詳註』の圈發は、連動しやすい情況下にあったことが窺えてこよう。

こうした情況から觀ると、『杜詩詳註』の圈發とは、皇帝との關わりによって附された要素が強い、と考えられよう。むろん、そもそも「音韻」は仇家の家學ゆえに、執筆を始めれば自然と音注も增えやすい。しかし、家學ゆえ自然と附いた、というだけでは、仇兆鰲が他の著作では圈發を附けていないだけに、積極的理由にはならないだろう。やはり他の要因も想定しなければなるまい。まさにその想定し得る要因こそが、皇帝への進呈に在った――と思われるのである。

6　康熙帝への進呈――音注執筆の要因（三）

（1）典麗な風格としての圈發

仇兆鰲は康熙三二年に『杜詩詳註』抄本を康熙帝へ進呈している。この進呈は、康熙帝が翰林官に對して詩文の提出を命じたのに應じて行われた。當時、康熙帝は翰林官たちの文章に不滿を持っており、[38] そこで翰林官たる仇兆鰲は、杜甫の詩集ならば御覽にふさわしいと考え、[39] 書きためていた『杜詩詳註』を進呈したのであった。

このことは、康熙という時代相も考慮に入れると理解しやすい。當時は、所謂「唐詩宋詩の爭い」[40] が有った時代であり、文壇では唐詩と宋詩のいずれを良しとするか、優劣を競っていた。そのような時代にあって、康熙帝は、『全唐詩』を編ませたことからも判るように、他ならぬ唐詩を好み、とりわけ杜甫を好んでいた。[41] とすれば仇兆鰲が『杜詩詳註』を著わすことは、康熙帝の滿足を得やすい行爲であった、と言えるだろう。

進呈された『杜詩詳註』抄本は、黃綾封面による豪華な裝丁であり、詩文には朱色鈐印による圈發が施されている。第2節（2）で先述したとおり、その詩文の相貌は、たとえば『永樂大典』內府本の朱色鈐印にほぼ似ている。おそらく仇兆鰲は、皇帝の御覽にふさわしくするために、『杜詩詳註』を內府本にも似た、豪華かつ典麗な風格の相貌にしたのであろう。圈發は、その一環であったと思われる。

（2）康熙帝の知遇

當時の詩集には、一般に圈發は附いていない。それだけに、仇兆鰲の圈發は、異彩を放ったはずである。しかもその詩集が、康熙帝の好む杜甫とあらば、その關心を惹くに充分であったことだろう。事實、この進呈によって、仇兆鰲は康熙帝の知遇を得てゆく。[42] 彼は四八歲（康熙二四年）で進士（二甲第八名）になってからも、必ずしも重用さ

れぬままでいた。五六歳で抄本を進呈したあと、仇兆鰲は亡父の遷葬のため歸鄉し、しばらく休暇をとり、友人たちと杜注に關して論じる。[43] そして六六歳（康熙四二年）の春、第四次南巡[44]にあった康熙帝の杭州行在所にて、『杜詩詳註』初刻本（寫眞3）を進呈した。そのさい、抄本にて鈐印した圈發を、この刻本でも同樣に附したのである。このとき參考にしたのが、刻本『御批通鑑綱目』『孝經衍義』の圈發であったのではないか。[45]

これ以降、仇兆鰲は左春坊左贊善兼翰林院檢討に昇進し、皇太子の講官に充てられる。[46] 御覽にふさわしく作った『杜詩詳註』は、皇太子の教本としても役立ったことだろう。やがて內閣學士、禮部侍郎、吏部侍郎、翰林學士といった要職を歷任してゆき、[47] 康熙帝の更なる厚い信任を得ていったのである。

7　結語

仇兆鰲『杜詩詳註』は、杜甫詩文を讀むさいの、先ずは據るべき基本的文獻である。『詳註』というその名にたがわぬ詳細な注釋は、解釋と鑑賞の一助として有用であるだけでなく、仇兆鰲がいかに杜甫詩文を味讀していたかをうかがうに足るだけの情報量を含んでいる。とりわけ、異常なほど熱心に注記された音注の數量は、注釋者仇兆鰲の熱意をより印象的に傳えていよう。

ただし、印象的には解っていた音注の多さについて、實證的かつ系統的な分析までは、從來あまり行われていなかった。そこで本稿は、この音注に關する一連の考察を進めた。

第一に、音注の正確な數量である。總計一一〇三五箇所にも達し、杜甫テキストとしては未曾有の規模の音注を含んでいることが判った。なかでも圈發という音注が、六六七五箇所も內在しながら、これまでほとんど見逃されたままでいた。しかし、圈發を含む詩集は稀少な例であり、まして六千を超える規模の圈發を含む詩集に至っては、皆無とさえ言ってよい。この意味において、一萬を超え、しかも圈發を含む音注が、まさに『杜詩詳註』ならではの特色たることが了解できよう。

第二に、この一萬を超す音注が、仇兆鰲自身に據って記されていた點。すなわちこの音注は、音韻を專門とする校訂者によって記された可能性も含んでいたのだが、調査の結果、仇兆鰲その人の手によって記されていたことが判明した。仇兆鰲は音韻を家學とする讀書人家庭に育っており、これほどの音注を表せるだけの音韻知識を、そもそも有していたのである。[48] この意味において、音注とは仇兆鰲の面目躍如たる注釋であったことが確認できよう。

最後に、なぜ一萬を超える音注が附されたのかという點。『杜詩詳註』の音注の中核を成しているのは、四聲別義に基づく、初音と破音の識別であり、すなわち意味と發音上の「讀み分け」である。それはいわば隋唐的（中古的）古典學の體系を正確に復元し、その正しい響きに從って杜甫を解釋・鑑賞したい、という強い熱意に支えられた注釋となっている。こうした熱意は、特に「知人論世」との深い關わりによって催されていたと思われる。杜甫という人を知りたい（知人）仇兆鰲は、杜甫が詠んだごとき隋唐的響きを正確に論じる（論世）ことによって、杜甫を友として尙ぼうと努めたのであろう。

この「正しく讀みたい」という仇兆鰲の熱意は、同時に、讀者に「正しく讀んで欲しい」という配慮となって向けられてもいた。むろん、正しい發音を必要とするのは、一般讀者も皇帝も同じことである。

とりわけ皇帝へは、詩集に普通は附けぬ「圈發」という音注をあえて附け、より入念な配慮を施していた。この「圈發」によって『杜詩詳註』は、内府本にも比する典雅さをそなえることとなる。

かくして仇兆鰲は、己れの熱意を満たすため、そして皇帝も含めた讀者に配慮するため、重複を避けぬ原則優先の姿勢で音注を記してゆく。その結果、一一〇三五箇所という未曾有かつ桁外れの音注が出現するに至ったのであろう。

こうして觀てくると、音注は『杜詩詳註』特有の要素であることがあらためて確認されよう。特有であるゆえに、この一萬を超える音注とは、意味と發音とを辨別する音注本來の機能のほかに、數多い他の杜甫注釋書と『杜詩詳註』とを辨別しうる明白な指標としても機能しているように思われる。

仇兆鰲は冒頭の中表紙にて、『杜詩詳註』を「誦習」して作ったと表明する。けっして局所的ではなく、全編にわたって丹念に記された膨大な音注は、その表明に僞りの無いことを裏付けていよう。同時に、他の注杜者に類を見ぬ音注は、いかに仇兆鰲が杜甫の響きに從おうとしていたのか、その想いの深さを傳えているのではなかろうか。その他に類を見ぬ膨大な數だけ。

注

(1) 生年を一六四〇年、卒年を一七一四年以降とする文獻が有るが、仇兆鰲自訂『尙友堂年譜』に據ると、一六三八～一七一七年が正しい。この自訂年譜は、中華書局および天一閣博物館にのみ所藏。閲覽は難しいが、次の論文を通じて概要を知ることが出來る。方南生「海内罕見的仇兆鰲自訂《尙友堂年譜》」(『文獻』一九八八第二期、書目文獻出版社)。

(2) 張靜「《杜詩詳注》訂誤」(『古典文獻研究』總第六輯、江蘇古籍出版社、二〇〇三年)。宋亞運「《杜詩詳注》與《讀杜詩說》叶韻考辨」(『河北科技大學學報』社會科學版、二〇〇四年第四卷四期)。陳若愚「中古又讀字與杜詩對同義又讀字的運用」(『内江師範學院學報』二〇〇五年第二〇卷一期)。吳淑玲「仇兆鰲思想概說」(『保定師範專科學校學報』二〇〇五年第一八卷一期)、同氏「仇兆鰲與浙東學派之關係」(『河北大學學報』哲學社會科學版二〇〇五年第一期三〇卷)。劉重喜「陳訏批《杜詩詳註》」(中國古代文學文獻學國際學術研討會論文、二〇〇四年八月、南京大學)、同氏「《杜詩詳註》版本考辨」(『中國詩學』人民文學出版社、二〇〇五年)。また、孫微『清代杜詩學史』(齊魯書社、二〇〇四年、一五一頁)や、『柏克莱加州大學東亞圖書館中文古籍善本書志』「杜詩詳註」二六二頁(上海古籍出版社、二〇〇五年)にも、仇兆鰲『杜詩詳註』に關する言及が見られる。

(3) ②の傳本論では、次の二編を發表して、抄本・刻本・排印本という三種存在する『杜詩詳註』の諸傳本の流れを整理した。「《杜詩詳註》傳本三種――抄本・刻本・排印本」(二〇〇四年中國唐代文學會、華南師範大學にて口答發表。『唐代文學研究』第一一輯、廣西師範大學出版社、二〇〇六年に掲載)。「中華書局排印本『杜詩詳註』について――その點校者と編纂背景、および『九家集注杜詩』との關連」(『中國詩文論叢』第二二集、中國詩文研究會、二〇〇三年)。

③の文藝論では、「『杜詩詳註』における「論世知人」――浙東鄞縣という文化的磁場」(『松浦友久博士追悼記念中國古典文學論集』研文出版、二〇〇六年)を公にして、そもそもなぜ仇兆鰲は『杜詩詳註』を執筆したのかを論じた。

(4) 陳若愚「仇兆鰲《杜詩詳註》音釋評議」(『西南民族學院學報』總一九卷、一九九八年)を參照。同氏にはこの他にも、次の專論があり參考になる。「注杜音釋原則雛議」(『内江師專學報』一九九七年第一二卷三期)。

(5) 稿者が數えた音注數と隔たりが有る原因は、おそらく陳若愚氏の數え方が、本來ならば音注とは認定しがたい「字訓」すらも音注の內に認定して數えているためではなかろうか。

(6) 宋代に、鄭卬『杜少陵詩音義』(卷數不詳)が存在しており、かなりの音注を含んでいたと推測されるのだが今日傳わらない。鄭卬の自序と音注の一部分のみが、『分門集註杜工部詩』の引用を通じて知ることができる。仇兆鰲も、『杜詩詳註』附編(排印本二二四五頁)にて鄭卬自序を引用しており、その存在を知ってはいた。ただし、鄭卬『杜少陵詩音義』を積極的に引用した跡が認められないゆえ、恐らく原物を參看してはいない。『杜詩詳註』卷二三「送重表姪王砅評事使南海」詩に、「瀧、鄭音雙」という音注が見えるのだが(二〇四五頁)、『分門集註杜工部詩』(卷九)からの孫引きと思われる。

(7) 圈發(點發)における位置と四聲は、時代によって變遷している。現存する敦煌文書では、七世紀末は右上角(平)を起點に加點されており、七世紀末には右下を起點とするもの・左上を起點とするものが現れている。現在の左下を起點とするものは、七世紀末ないし八世紀初めの文書にて確認される。以上の點に關しては、石塚晴通「敦煌の加點本」(講座敦煌5『敦煌漢文文獻』大東出版社、一九九二年)に詳しい。

(8) この『杜律趙注』刻本は、光緒年間にも翻刻されている(早稻田大學圖書館藏)。中表紙には「仇滄柱先生鑑定」と記されており、光緒の時點でも、仇兆鰲の名は書名に冠されるほど知れ渡っていたことが窺える。

(9) ③沈德潛『杜詩偶評』凡例には「字有一字幾音者、恐混讀者多、習焉不覺。茲隨四聲圈出、使讀者一覽了然(字に一字に幾音なる者有り、混讀する者多く、焉を習ふに覺へざらんことを恐る。茲に四聲に隨ひて圈もて出だし、讀者をして一覽了然せしめん)。」と記されており、こうした明確な意識が有るゆえ、例外的に多くの圈發が含まれている、と了解されよう。六二四箇所の圈發を含むこの『杜詩偶評』は、その後『音註杜少陵詩』(上海中華書局、一九四二年)となって、その意匠を繼がれたことがある。なお、⑤楊倫『杜詩鏡詮』凡例にも、③沈德潛とほぼ同じ表現が見えており、楊倫はこれを踏襲したと思われる。

(10) この他、たとえば次のテキストにも圈發は見られなかった。

『靖節先生集』(陶淵明、道光刊本)
『庾開府集』(庾信、明新安汪氏刊本)
『王勃集』(嘉靖三一年江都黃埠東壁圖書府刊本)
『沈佺期集』(嘉靖三一年江都黃埠東壁圖書府刊本)
『李太白文集』(王琦輯注、乾隆二四年序寶笏樓刊本)
『新刊增廣百家詳補註唐柳先生文』(柳宗元、北京圖書館藏宋刻影印本)
『蘇學士文集』(蘇舜欽、康熙三七年徐氏白華書屋刊本)
『陽明先生文錄』(嘉靖二六年張良才重校刊本)
『蘇老泉先生全集』(蘇洵、康熙三七年邵仁泓安樂居刊本)
『屈翁山詩集』(屈大均、康熙閒刊本)
『曝書亭集』(朱彝尊、康熙五三年朱稻孫刊本)
『遂初堂文集』(潘耒、康熙四九年序刊本)
『亭林文集』(顧炎武、康熙閒潘耒遂初堂亭林遺書本)
『漁洋詩集』(王士禎、康熙三八年錫山黃氏刊本)
『敬業堂詩集』(查慎行、康熙五八年刻雍正閒增刻本)
『鉛山文集』(趙執信、乾隆三九年因園刊本)
『小倉山房詩集』(袁枚、咸豐元年序番禺謝氏梅花詩屋刊本)

なお例外的に、吳瞻泰『陶詩彙注』(光緒二二年滇中五塘山人重校刊本)には四六三箇所もの圈發が附されているのだが、北京師範大學圖書館に所藏された同書の康熙四四年吳瞻泰序刊本には圈發が見えない。ゆえに、この四六三箇所の圈發とは、吳瞻泰(順治康熙頃の諸生)に據るものではなく後人の手に據る可能性が高く、康熙年閒の詩集にはやはり圈發が附かぬ傾向にあったことを示す一例として理解できよう。

(11) 圈發については、管錫華『中國古代標點符號發展史』(巴蜀書社、二〇〇二年)が、その變遷を整理しており、參考になる。

(12) 『史記正義』「發字例」に、「古書字少、假借蓋多、字或數音、觀義點發、皆依平上去入(古書字少なく、假借蓋し多し、字或るいは數音、義を觀て點發し、皆な平上去入に依る)。」とある。

(13) 朱熹門下の黄幹は、『勉齋批點四書例』にて、「考許叔重『說文』及鄭夾漈『六書略』、每字有兩音者、先依夾漈所正叔重之誤者、餘方依叔重之正始音、然後依本文音義、隨四聲圈發。其音義參陸氏『經典釋文』・賈氏『群經音辨』、大抵依朱子爲主。(許叔重『說文』及び鄭夾漈『六書略』を考ふるに、字の兩音有る者なる毎に、先づ夾漈が叔重の誤りを正す所の者に依りて、餘は方に叔重の正始音に依り、然る後に本文の音義に依り、四聲に隨ひて圈發す。其の音義は陸氏『經典釋文』と賈氏『群經音辨』を參し、大抵朱子に依りて主と爲す)」と述べる(元・程端禮『讀書分年日程』卷二所引)。

(14) 『永樂大典』における圈發に關しては、注11所掲書二一四頁「《永樂大典》中標點符號」に、詳細な解說が見え、參考になる。

(15) 金文京氏の「第二屆中國古典小說數字化研討會及第二屆『三國演義』版本研討會」(首都師範大學、二〇〇三年九月)における口頭發表に據る(沈伯俊「『三國演義』版本研究的新進展」『社會科學研究』二〇〇四年五期に引用されている)。また金文京氏からは、佐藤の口頭發表(「仇兆鰲『杜詩詳註』の音注について」)のさいにも御敎示いただいた(日本中國學會第五十六回大會。二〇〇四年一〇月九日。二松學舍大學)。深くお禮申し上げる。

(16) この朱圈はいずれも完全な圓を描いているゆえ、手書きではなく、先端に朱色を塗って印したもの、すなわち朱色鈐印と思われる。

(17) この點に言及しているのは、謝國楨「不下帶編」(『明淸筆記談叢』中華書局、一九六〇年、一三五頁)、王湜華點校『不下帶編 巾箱說』(中華書局、一九八二年)、周采泉『杜集書錄』(上海古籍出版社、一九八六年、二〇七頁)、蔣寅「《杜詩詳註》與古典詩歌注釋學之得失」(『杜甫研究學刊』一九九五年第二期、總第四四期)。

(18) 金埴は若き日、北京で官となった父を訪ね、「燕京五月歌」を詠み、王士禎を訪れたところ、王士禎は金埴の父に「君の詩を嗣ぎ、後進の秀たり」と褒めたという。金埴の名は三百年ほど埋もれていたのだが、彼の著書に、交流のあった洪昇と孔尙任の事蹟が記載されていたため、繆荃孫『古學叢刊』が彼の著書を收錄し、これにより再びその名を知られるようになった。注17所掲、謝國楨『不下帶編』一三五頁を參照。

(19) 比較調査は、「上海圖書館藏の抄本」「復旦大學および東洋文庫藏の初刻本」と「中華書局の排印本」を用いて行った。これら『杜詩詳註』の版本に關しては、注3②所掲の拙論および注2所掲の劉論文二〇〇五を參看されたい。

(20) 卷一八「荊南兵馬使太常卿趙公大食刀歌」詩の「鐫錯碧甓、鶡鶾膏、鋩鍔已瑩虛秋濤」に「音英」、および卷二〇「從驛次草堂復至東屯茅屋」詩の「築場看斂積、一學楚人爲」に「平聲」の音注。ともに抄本・初刻本の段階では見えず、金埴が參加した補刻本以降から見える。

(21) 刻本の卷八、四五葉左「看」が、音注「去聲」に對して圈發が左下「平聲」。および卷一四、一三葉左「喪」が、音注「平聲」に對して圈發が右上「去聲」。

(22) この中表紙は、康熙三二年の抄本には無い。

(23) 注1所掲の年譜および方南生論文による。

(24) 仇兆鰲の父は、その名を「邃道」といい、「理學」を深く修める人だった。注1所掲『尙友堂年譜』および方南生論文を參照。

(25) 注1所掲『尙友堂年譜』康熙二八年の項。

(26) 張民權「論淸儒仇廷模對《集韻》聲韻問題研究的貢獻」(『音韻訓詁與文獻研究——張民權自選集』北京廣播學院出版社、二〇〇四年。原載

『漢語史研究集刊』第五輯、巴蜀書社、二〇〇二年）および同氏『清代前期古音學研究』下卷「仇廷模」（二九五頁、北京廣播大學出版社、二〇〇三年）を參照。

(27) 蔣寅「王漁洋與清代古詩聲調論」（『王漁洋與康熙詩壇』中國社會科學院出版社、二〇〇一年）を參照。

(28) 仇兆鰲は二八歲のとき、黃宗羲の講筵に列した。黃炳垕『黃梨洲先生年譜』卷中に、「（康熙）四年、乙巳、公五十六歲。春、甬上萬充宗・萬季野（斯同）・陳介眉・夏獻・董在中・巽子・吳仲・仇滄柱（兆鰲）等二十餘人咸來受業。」とあり、二〇數名の者たちが皆、その學業を授かるべく訪れて來たことが記されている（『黃宗羲年譜』中華書局、一九九三年、三三頁）。

(29) 黃宗羲と仇兆鰲の師弟關係については、注3③所揭の拙論「仇兆鰲『杜詩詳註』における論世知人」第三節「鄞縣という磁場」五二八頁を參照されたい。仇兆鰲は、康熙四年（二八歲）に黃宗羲の門弟となり、康熙三二年（五六歲）に黃宗羲が『明儒學案』を撰したさい、序文を寄せて「受業仇兆鰲」と署名している。

(30) 「反覆沈潛」は、讀書における常套表現であり、たとえば『朱子讀書法』卷二および四や、『明儒學案』卷五二など、多くの用例が見られる。

(31) 清代前期における「知人論世」の言及例を他に擧げると、たとえば吳淇『六朝選詩定論』（康熙八年序刊）の卷一「六朝選詩緣起」があり、作者の心を知るにはその人を知らねばならず、その人を知るには、その人が生きた時代を知らねばならないことが强調されている。

(32) 孟子謂萬章曰、「一鄉之善士、斯友一鄉之善士。一國之善士、斯友一國之善士。天下之善士、斯友天下之善士。以友天下之善士爲未足、又尚論古之人。頌其詩、讀其書、不知其人、可乎？　是以論其世也。是尚友也」。（孟子、萬章に謂ひて曰く「一鄉の善士は、斯ち一鄉の善士を友とす。一國の善士は、斯ち一國の善士を友とす。天下の善士は、斯ち天下の善士を友とす。天下の善士を友とするを以って未だ足らざると爲せば、又た古の人を尚び論ず。其の詩を頌し、其の書を讀むも、其の人を知らずして、可ならんや？　是を以って其の世を論ずるなり。是れ尚び友とすることなり。」）

(33) 同一の音注が反復する例としては、『杜詩詳註』の他に、臧晉叔『元曲選』が想起されよう（佐々木猛氏の御敎示）。『元曲選』にも七八五〇餘箇所もの音注が含まれ、同一の音注が何度も繰り返し記されている。この點については、川島郁夫「『元曲選』の中の音釋について」（『中國俗文學研究』第一二號、一九九四年）で指摘されている。

(34) このほか「數・長・易・行」等の字にも、多く音注が附されているのだが、これら字の音注は單に頻出するだけでなく、さらに何種かに分析された上で表記されている。たとえば本稿第2節（1）所揭の寫眞1でも示した「數」を例に言うと、所主切18回、色角切11回、色主切4回、所角切4回、音朔22回、上聲1回、という具合に表記されている。こうした複數種類の音注が見える點については、次の可能性を擧げたい。すなわち、もし音韻學的な正確さを求めるのであれば、同一の反切字であってもよいだろう。破讀であることを示せば充分だと考えていたからこそ、一見やや不注意に思える複數の反切があるのかもしれない。

(35) この「義從〜、讀從…」という音注に關しては、水谷誠「『杜詩詳註』に見える「義從平聲、讀用去聲」について」（『中國詩文論叢』第三集、中國詩文研究會、一九八四年）に詳しい。

(36) 注1所揭の年譜および方南生論文によると、仇兆鰲は二二歲で橫涇という所で學校を開き、三二歲のときには杭州の寺で學校を開き、兒童の敎育に携わっていた、という。

(37) 注1所揭の年譜および方南生論文による。

(38) 『清實錄』（卷二五九、康熙三二年癸酉夏四月）に、次の諭旨が見える。「諭大學士等。翰林官以文章爲職業。今人好講理學者、輒謂文章非關急

務。宋之周程張朱、何嘗無文章。其言如是、其行亦如是。今人果能如宋儒、言行相顧、朕必嘉之。卽天下萬世亦皆心服之矣。傳諭翰林官知之。」（大學士等に諭す。翰林官は文章を以って職業と爲す。今人、理學を講ずるを好む者は、輒ち文章は急務に關はるに非ずとへり。宋の周（敦頤）・（二）程・張（載）・朱（熹）は何ぞ嘗て文章無からんや。其の言、是くの如し、其の行も亦た是くの如し。今人、果して能く宋儒の如く、言行相ひ顧みれば、朕必ず之を嘉みせん。卽ち天下萬世も亦た皆な之に心服せん。傳諭して翰林官に之を知らしむ。）

(39) このことは、『杜詩詳註』序文にて明らかにされている。「翰林院編修臣仇兆鰲、奏爲恭進『杜詩詳註』事。本年孟夏之月、伏蒙皇上傳諭、翰林諸臣所著詩古文章、抄錄呈進、以備御覽。（翰林院編修臣仇兆鰲、奏して恭しく『杜詩詳註』を進むる事を爲す。本年孟夏の月、伏して皇上の傳諭するを蒙むり、翰林の諸臣 著す所の詩と古文章とを、抄錄して呈進し、以って御覽に備ふ。）」

(40) 注27所掲の蔣寅『王漁洋與康熙詩壇』、および張健『清代詩學研究』（北京大學出版社、一九九九年）等を參照。

(41) 『聖祖仁皇帝御製文集』に、「詩至唐而象體悉備、亦諸法畢該。故稱詩者必視唐人爲標準、如射之就彀率、治器之就規矩焉（詩は唐に至りて象體悉く備り、亦た諸法畢に該る。故に詩を稱する者は必ず唐人を視て標準と爲し、射の彀率（弓を引きしぼる度合い）に就き、器を治むるの規矩に就くが如し）。」（三集、卷二〇『全唐詩序』）と記されており、康熙帝が、宋詩ではなく唐詩を優先していたことが判る。また康熙帝は、「若夫宋人爲詩大率宗師杜甫、其卓然（若し夫れ宋人の詩を爲るや大率杜甫を宗師とするは、其れ卓然なり）。」（初集、卷二一『詩說』）とも述べており、とりわけ杜甫を評價していたことが窺える。

(42) この點については、張忠綱『杜集書目提要』（齊魯書社、一九八六年、一六七頁）でも指摘されている。「仇兆鰲……康熙二十四年（一六八五）進士、選庶吉士、散館授編修。然一直未獲重用。康熙四十三年、仇氏已六十七歲、以呈進所撰『杜詩詳注』而受知康熙帝、遂命總裁纂修『方輿程考』、昇授翰林院檢討」。この他にも、陳正宏『中國學術名著提要』（復旦大學出版社、一九九九年、二八六頁）と、孫微『清代杜詩學史』（齊魯書社、二〇〇四年、一五二頁）にも、同樣の指摘が見える。

(43) 注1所掲の年譜および方南生論文による。

(44) この二年後に、康熙帝は『全唐詩』校刊の敕命を出している。仇兆鰲の進呈は、唐詩優先の機運を高める作用も有ったのではなかろうか。

(45) 文字媒體の音注と圈發とが併記されている點については、釜谷武志氏より次の可能性を御提示いただいた。すなわち、最初の時點では圈發は附いて無く、皇帝へ獻上するに及んで圈發をつけた。そのさい音注が重なる箇所については、文字媒體の音注を省くこともできたがそのまま殘し、そこに圈點を附けたため、二重になる箇所が多くなったのではないか、と。貴重な御示教に、厚くお禮申し上げる。

(46) 注1所掲の年譜および方南生論文による。

(47) 注1所掲の年譜および方南生論文による。

(48) もちろんその音韻理解については、清代からすでに批判があり、施鴻保（一八〇四～一八七一）『讀杜詩說』は、その急先鋒として知られる。實際、仇兆鰲の音韻知識は、今日的觀點から見れば問題點も含んでおり、たとえば「叶韻」理解の不正確はその一つである（注2所掲の宋亞運論文を參照）。陳第や顧炎武による「叶韻」の最新知識を得ぬままでおり、それは次男の仇廷模に至っても然りであった（この點は、注26所掲の張民權論文でも指摘されている）。この明末までの舊い知識を引き摺ってしまっている點は、仇兆鰲の音注が、今日まで充分に採り上げられることの無かった要因と言えるかもしれない。今後こうした點の適否を見極め、より體系的に『杜詩詳註』の音注を理解することが肝要であろう。